

同志社大学  
2018年度 卒業論文

論題：同志社大学男子大学生で考える交際関係に入れない要因

社会学部社会学科  
学籍番号 19151066  
氏名 坪内裕貴  
指導教員 立木茂雄教授  
(本文の総字数 21633)

要旨

本稿では恋人がいない男子大学生に焦点を当て、その中でも恋人が欲しいと思うが行動に移せない学生が持つ行動を起こさない要因について調査を行ったものである。現在日本では恋愛に対して消極的である若者が増加しており、内閣府の調査で以前よりも恋愛に対する意欲が弱まっていると考えられるデータも存在している。そのような恋愛に消極的な若者に注目した調査は恋愛を不要であると考えている層に対して行われたものが多く、恋愛をしたいと思っている層にたいして行われた調査は少ない。そこで恋愛をしたいにも関わらず行動を起こさない状態にある現在大学生の20歳代男性にインタビューを行い、行動を起こさない要因は何であるのか調査した。この調査から「自信」、「理想」、「過去の恋愛経験」が要因として関係することが分かった。

[キーワード] 「自信」「理想」「結婚」

## 目次

1 はじめに .....	1
2 先行研究 .....	1
2.1 現在の恋愛研究.....	1
2.2 恋愛の変遷.....	2
2.3Anthony Giddens の概念.....	2
(1)ロマンティック・ラブ .....	2
(2)コンフルエント・ラブ .....	4
(3)固着した関係性.....	5
3 調査方法 .....	6
3.1 調査概要.....	6
3.2 詳細情報.....	6
3.3 調査当初.....	8
4 結果と考察.....	8
4.1 ロマンティック・ラブ .....	8
4.2 コンフルエント・ラブ .....	13
4.3 固着した関係性.....	17
4.4 全体の傾向.....	19
5 おわりに .....	22
〔注〕 .....	23
〔参考文献〕 .....	23

## 1 はじめに

現在、若者の恋愛離れが叫ばれている。筆者の周囲でも恋愛未経験者や恋愛に対して面倒だと考える人は存在する。そして筆者も恋愛に対して面倒だと感じている。実際の調査として内閣府の『結婚・家族形成に関する意識調査』報告書（2014）によると20代30代の男女「未婚者、かつ現在恋人がいない人」761人に対して行った調査では「恋人が欲しいですか?」という項目に対して20代男性229人のうち39.7%が恋人は必要ないと答え、20代女性236人のうち41.4%が同様に恋人は必要ないと答えた。この結果は30代男女と比べても高い数値となっている。さらに、調査では761人のうち交際経験の有無で見た時、交際経験ありの男女の内29.5%と交際経験なしの男女の50.3%が、恋人がほしいと思わないと回答しており761人全体では約4割の男女が、恋人がほしいと思わないと回答している。この結果から見て恋人をほしいと思わない層が決して少なくないこと、恋愛離れが社会全体として起こっていることがうかがえる。

そしてこの問題は男性に対してよくクローズアップされる。2006年には草食系男子という恋愛に消極的な男性を指す言葉が生まれ2009年には新語・流行語大賞にノミネートした。さらにその後、絶食系男子という恋愛に全く興味の無い男性を指す言葉も生まれた。

このような社会の流れから現在、社会問題となっている婚期が遅れる晩婚化や少子高齢化が深刻化しているのも頷ける。そこで筆者はなぜ現在恋愛に対して消極的になる人が増えているのか。恋愛行動を起こさない、もしくは起こすことのできないのは、なぜなのかについて調査し分析する。これからの日本社会を改善するために必要な研究であるといえるのではないだろうか。

## 2 先行研究

### 2.1 現在の恋愛研究

では実際に現在までではどのような研究が行われてきたかについて述べる。主に恋愛は心理学の分野として数多く扱われてきた。その中でも以前までは見られなかった自我発達やアイデンティティ形成から恋愛に対してアプローチする研究が近年見られる。研究の結果として恋愛関係と自我発達・アイデンティティの形成との関連があると示している。先駆けとして自我発達とアイデンティティ形成から恋愛の研究を行ったのはJ.Dietch

(1978)である。この際に行った研究方法としては恋人がいる者と恋人がいない者とを比較する方法がとられている。しかしこの研究の対象者である恋人がいない者の中には、恋人がほしいと思っているが恋人ができない者と、恋人がほしいと思っておらず恋人がいない者が含まれているとし、行われた新たな調査が高坂康雅(2011)の行った研究である。この研究では恋人がいる青年を恋愛群、恋人がいなくてほしいと思っている青年を恋愛希求群、恋人がいなくてほしいと思わない青年を恋愛不要群として、精神的健康、自我発達、個人主義という3つの観点から比較検討を行っている。その結果、恋愛不要群は恋愛群、恋愛希求群と比較して、アイデンティティの感覚が得られておらず、無気力で独断性が強いと示された。さらに高坂(2013)は恋愛不要群に焦点を絞り恋愛不要群の恋人をほしいと思わない理由から恋愛と自我発達との関連を検討している。結果としては恋愛不要群の中でも不要理由によって自我発達の程度に差があることを示し、恋人をほしいと思わ

ない青年の理解に示唆を提供した。しかしながらこの研究では恋愛不要群に焦点を絞り行われたことにより、恋愛希求群の中に存在する〈恋愛をしたいと思っているが行動に移せない青年〉の恋愛行動に移せない理由が検討されていない。そこで筆者は恋愛希求群の中の〈恋愛をしたいと思っているが行動に移せない青年〉がなぜ行動を起こさないのかを調査する。以下に調査するにあたり始めに恋愛の変遷について述べ、次に現在の恋愛がどういった関係性であるのか Anthony Giddens の理論枠組みを使い理解する。

## 2.2 恋愛の変遷

現在の恋愛について調査する前に過去の恋愛の変遷について手短かに述べる。それにより現在の恋愛がどういった枠組みであるとされているのか明確にする。近代以前の恋愛として少年愛、騎士道恋愛、宮廷恋愛が挙げられる。谷本奈穂・渡邊大輔（2016）によると少年愛とは、美少年との間で性的関係を結ぶことを理想とする恋愛であり、11~12世紀に入ると中世ヨーロッパの騎士道恋愛が登場した。騎士道恋愛では騎士が自分よりも身分の高い既婚の女性や貴婦人を理想化する女性崇拝が行われた。さらに17~18世紀に入り宮廷恋愛が登場する。宮廷恋愛では恋愛に性的要素が含まれるようになり、貴婦人が愛人を持つ不義が許されるようになった。そしてこれらの恋愛は共通点を持つ。それが「それらの共通の特徴は結婚の外でなされたこと」（谷本・渡邊 2016）であった。このことから恋愛対象と結婚対象が別であることが分かる。それにより恋愛が結婚を脅かすことはなかった。結婚相手を決めていたのは恋愛感情や当人の自由意志ではなく、身分や家柄、財産などの経済的・社会的要因であった。現在のような恋愛のち結婚という形では無かったのである。

しかし近代に入り貴族に変わりブルジョアジーが台頭することで状況が変化した。「恋愛は、罪であり、社会にとって望ましい結婚制度を崩壊させる危険性をもつ」（谷本・渡邊 2016）とみなされるようになったのである。これにより井上 俊（1973）によると恋愛は「家族的秩序」や「階級的秩序」を脅かすものとなったのである。この状態を解消するために登場したのが現在の恋愛結婚である。恋愛結婚とは恋愛を経て、愛する人と結婚するという新しい形である。これによって「結婚相手としてふさわしい相手に抱く感情こそが〈恋愛〉」（谷本・渡邊 2016）という考えが生まれたことで恋愛を結婚という社会制度の中に取り込むことを容易にした。

つまり現在のように自分の愛する人と結婚することが正しいと認識されるようになったのである。この考え方を支えたのがロマンティック・ラブである。

## 2.3 Anthony Giddens の概念

### (1) ロマンティック・ラブ

「ロマンティック・ラブ」を説明する前に親密な関係性について述べる。Anthony Giddens（1992=1995）によると親密な関係性とは男女間に限らない人と人との関係性であり、高度経済成長期以降に重要視された。その特徴として1つ目に「親密な関係性を感情的緊密さの絶えない要求とみなすのであれば、明らかにその通りかもしれない」

（Giddens 1992=1995: 14）という点より、自分と他人のお互いの気持ちが緊密につながりあっていること。2つ目に「親密な関係性は、公的領域における民主性と完全に共存できるかたちでの、対人関係の領域の掛け値なしの民主化という意味をとらなう」（Giddens

1992=1995: 14) という点より親密な関係性はお互いの利益〈掛け値〉をお互いに期待しているのではないこと。利益とは関係性によってもたらされる精神的な充足感や価値である。3つ目に「親密な関係性とは、相手に夢中になるのではなく、相手の特質を知り、それを自分自身の特性に生かしていくことである」(Giddens 1992=1995: 142) という点、4つ目に

親密な関係性は、その人がおそらく世間の目にはさらすはずのない感情や行いを相手に開示することを意味している。事実、他の人たちには隠してきたことがらの開示は、おそらく相手から信頼感を引き出し、それと引き換えに相手の信頼に依拠していくための、主要な心理学的標識の一つなのである (Giddens 1992=1995: 207)。

と述べる点より相手に自分の心のうちを見せることで信頼を獲得する必要性がある点があげられる。これら4つの特徴から親密な関係性は利益を求めず自己開示をお互いに行いそれによって信頼を得る。そして自己開示によって得られた相手の感情に自身の持つ特性にいかし「しかるべき行い」(Giddens 1992=1995: 146) をする関係性である。「しかるべき行い」とは相手が求めている行動である。この関係性を支えていたのが、Giddensによると親密な関係性のもととなったロマンティック・ラブがもつ一度結婚してしまえば、ほかの人とは恋愛しないという点である。ロマンティック・ラブが理想とされていた時代は見合い結婚が主流であり、自分と恋愛関係にある相手に世間の目にさらすはずのない感情や行いをさらしたとしても、親の勧めである結婚や経済的事情からの結婚という枠組みに強く守られていた。そのため、自己開示を積極的に行ったとしても現在のような離婚につながる可能性は低く、むしろ積極的に開示することで相手の信頼を得る関係性が理想となった。その点をもとに親密な関係性は誕生した。では、この親密な関係性のもととなったロマンティック・ラブはどのようなものであるか述べる。ロマンティック・ラブは、親密な関係性とは異なり男女の関係性である。日本では高度経済成長期に普及した。ロマンティック・ラブの特徴は5点ある。1つ目に Giddens (1992=1995) によると自らの意思や感情に基づいて交際相手や配偶者を選ぶことを肯定し、自分が選んだ相手と恋愛を経て結婚する。そして一度結婚してしまえば、ほかの人とは恋愛をしないという点。2つ目に「関係性が外部社会の基準よりも二人の感情的没頭に由来する」(Giddens 1992=1995: 95) という点。3つ目に関係性が2人の関係性が「永遠」で「唯一無二」な特性を持つ点。4つ目に特別な関係性より特別な人を捜し求める点。具体的には〈○○のような関係を保つことのできる人が良い〉というのではなく〈○○に似ている人で、○○に興味があって○○な人が良い〉というように自分の求める特定の恋愛相手の像が「特別な人」である。5つ目に「ほとんどの男性にとって、女性をたらしこまなければならないという至上命題と緊張状態に置かれている」。(Giddens 1992=1995: 92) 点である。なぜこの特徴を持つかというロマンティック・ラブ当時、女性は「高潔さ」(1992=1995) が重要視されており、女性はむやみに性的行動をとるべきではないと考えられていた。しかしながら男性の場合、そのような状況にある女性をいかにして口説き落とすかが重要視されていたため、女性をたらしこむという特徴を持っている。

Giddens (1992=1995) によると近代発展していく初期の段階では恋愛と結婚が不可逆的に結びついていた。しかしながら現在では自由恋愛を行った後の結婚が主流となり、必

ず恋愛が結婚に結びつくことがなくなった。それにより、ロマンティック・ラブの特徴である「永遠」で「唯一無二」の状態が崩れ、性的開放と自立が進み崩壊しつつある。そしてロマンティック・ラブ以降の恋愛の形として登場したのがコンフルエント・ラブである。

## (2) コンフルエント・ラブ

コンフルエント・ラブは1980年代より、経済成長の鈍化、不況、雇用の不安定化、価値観やライフサイクルの多様化などに伴って誕生しつつある新しい愛の形である。Giddensはコンフルエント・ラブを「ひとつにとけあう愛」(1992=1995)と表現している。その特徴として、Giddens(1992=1995)によると1つ目に能動的で偶発的な愛情であり、ロマンティック・ラブに対する「永遠」で「唯一無二」と矛盾する点。2つ目に対等な条件の下での感情のやり取りを想定しており、お互いに相手に対してどれだけ関心や要求をさらけ出し、無防備になれる覚悟があるのかによって愛情が深まっていく点。3つ目に関係の維持か解消かを関係性の継続が価値あるものとするに十分な利益をお互いに得られているのかで、判断できる点であり相手との関係性に満足できない場合は、簡単に別れることがある。これら3つの特徴がある。そしてこのようなコンフルエント・ラブは、対等な条件下での感情のやり取りを想定しているため、男女間の関係性は純粋な関係性に近づく。純粋な関係性とは

性的純潔さとは無関係であり、また単なる記述概念でなく、むしろ限定概念である。純粋な関係性とは、社会関係を結ぶというそれだけの目的のために、つまりお互いに相手との結びつきを保つことから得られるもののために社会関係を結び、さらにお互いに相手との結びつきを続けたいと思う十分な満足感をお互いの関係が生み出しているとみなす限りにおいて関係を続けていく、そうした状況を示している」という特徴を持つものである(Giddens 1992=1995: 90)。

ここから読み取れることは、互いに相手との結びつきを続けたいと思う満足感を互いが認識している場合において関係を続けていくため、お互いの意思の確認のために相互のコミュニケーションが必要不可欠であるという点である。加えて、お互いの自発的な感情によって関係性の構築や維持、そして解消をすることが出来るという点も読み取ることが出来る。しかしながら、自発的に関係の解消が行えることによるリスクがある。リスクとは関係性が解消されたときの精神的打撃のことである。ロマンティック・ラブの頃は決められた相手と永続的な関係性が求められており関係性が解消される不安が今以上に少なかった。したがって相手に対して無条件で自己開示をすることが容易であったのである。

一方で現在の状況を見る。現在日本は厚生労働省の平成28年度(2016)『人口動態統計の年間推移』を見ると2016年度の離婚件数は217,000組であり日本においてロマンティック・ラブが普及した1960年代半ば(ここでは1965年を例にする)は77,195件であり、比較すると現在は離婚件数が約2.8倍となっている。これにより恋愛の先に待つ結婚後の関係でさえ不安定なものであることが分かる。今日ではこのように以前より関係性を簡単に解消できるので解消した場合の精神的リスクがある。この点で今の社会では自己開示は無条件では行えない困難なことであるのだ。そのためお互いが関係性の中で得られる

ものという利益が必要になるのである。そしてリスクに耐えうる精神力も必要となる。加えて現在では高度経済成長期に見られた見合い結婚とは異なり交際する相手や結婚相手を自分の意志で自由に決定や解消できるようになったことにより、愛が個人の感情や気持ちのような曖昧なものを基礎におくようになった。したがって、だれを選んで付き合いとしても幸せになれる可能性があるはずであるのに、今自分が恋寄せている人よりいい人が現れるのではないかというような不完全感や迷いが起こってしまう。これらのような問題点をコンフルエント・ラブは抱えている。

### (3) 固着した関係性

ロマンティック・ラブおよびコンフルエント・ラブについて論じたが、現在固着した関係性という状態も現れている。以下からは固着した関係性について論じる。この関係性はアルコール依存症者に由来している。依存症者は普段接していく相手（主に配偶者、パートナー）に影響をもたらす。その影響とは依存症者のパートナーの生活が依存症者を中心としたものになることである。具体的には依存症者に対してパートナーは献身的に愛情を注ぎ、心遣いを行うことで依存症者を救おうと活動を行う。このような状態が長く続くことにより、依存症者からパートナーへの依存という形からパートナーの生活が依存症者中心になり、パートナー自身の行動が依存症者中心に展開されるようになる。相互に依存しあうのである。この状態を共依存といい、Giddens は

共依存症の《人》とは、生きる上での安心感を維持するために、自分が求めているものを明確にしてくれる相手を一人ないし複数必要としている人間である。つまり共依存症者は、相手の欲求に一身をささげていかなければ、みずからに自信をもつことができない」と述べている (Giddens 1992=1995: 135)。

そしてこのような状態にある人は同じような類の相手と心理的に強く結びつくとされている。お互いに強く依存しあった関係性を「固着した関係性」(Giddens 1992=1995) と定義している。この固着した関係性の特徴は生きる上で安心感を維持するために相手が求める他者性に依存することである。このような固着した関係性に陥りやすい思考方法を「嗜虐的プログラミング」(Giddens 1992=1995) という。嗜虐的プログラミングとは以下などである。

「そんなことは、自分にはとてもできない」

「そんなことしたって上手くいかないのが自分にはちゃんとわかってる」

「そんなことは、自分には向いていない」

「自分には何もかもやり遂げる余裕なんか、まったくないように思う」(Giddens 1992=1995: 138)

この思考方法を行うことで通常どのような行動をとるのか自由な選択肢があるにも関わらず、すでに確立している型にはまった行いを選択してしまうのである。

このような思考方法及び固着した関係性に陥らないために必要であるのが「個人的境界」(Giddens 1992=1995) である。個人的境界とは自分と他者を線引きする境界線で、

何が誰に所属しているかを規定しており、それによって自己投影的同一化の及ぼす影響を減殺していくことができるものである。

自己投影的同一化とは自己と他者を同一視し、投影（自らの感情や思考や動機を他人になすりつける）と摂取（他人の感情や動機や思考を取り込む）の要素をもつものである。つまり自らの考えを捨て、行動理由を他者に置くことである。この状態を個人的境界は減滅することができる。Giddens は以下のように述べた。

相手に心を開くことは、気持ちの通じ合いをどのように計るかという問題になるからである。相手に心を開くことは個人的な考えをまったく持たずに生きることではない (Giddens 1992=1995: 142)。

つまり相手を自分の個人的な考えをもった上で理解する必要がある。相手は自分にとってどういう人間であるのかを自分の考えと照らし合わせることで、相手と気持ちが通じ合い、相手を真の意味で理解し関係性を維持することが出来るのである。

### 3 調査方法

#### 3.1 調査概要

以上、現在取り組まれている研究について、そして Giddens の述べる現在の人間関係における親密性の変容についてみてきた。確かに現在の若者の恋愛に対する消極的な姿勢は過去の研究で述べられているように自我発達との関連性があるという事は事実である。高坂 (2013) が行った、恋人がいる者と恋人がいない者に分け、さらに恋人がいない者を〈恋人がいなくてほしいと思っている青年 (恋愛希求群)〉と〈恋人がいなくてほしいと思わない青年 (恋愛不要群)〉に区分し、特に恋愛不要群を恋愛不要理由から研究することで、心理的特徴の多様性や自我発達の程度に差があることを明らかにしたことからも言える。しかし、高坂 (2013) は恋人がいない層を恋人がいなくてほしいと思う層と恋人がいなくて欲しいと思わない層に区分するにとどまる。この研究で扱われる〈恋人がいなくて欲しいと思う層 (恋愛希求群)〉の中には恋人を作るために行動する層としない層が混在していると考えられる。そのため、この研究では恋人を不要とする理由については明らかにしていたが、恋人が欲しいが行動しない恋愛希求群の理由まで把握することができていないと考える。

そこで筆者は調査対象を若者と考えられる 20 代前半の同志社大学生に定め、上記の研究で詳細を扱われなかった恋人は欲しいが恋人を作るために行動しない層（以下から恋愛希求行動無し群<sup>1)</sup>と記述）に焦点を当て、「なぜ恋人が欲しいにもかかわらず交際関係に入るために行動を起こさないのか」というリサーチクエスチョンを立てた。行動を起こさない要因を調査し、この調査で現在まで主な研究対象とされていなかった恋愛希求群のさらなる理解を進め、若者の抱く恋愛に奥手になっている理由の発見を目的としインタビュー調査を実施した。

#### 3.2 詳細情報

調査は 2018 年 9 月から 2018 年 11 月末にかけて不定期で実施した。調査方法としては

同志社大学に在学する恋人がおらず欲しいと思っではいるが行動しない男子大学生 8 名にインタビュー調査を行った。インタビュー形式は半構造化インタビューをとり、インタビュー時間の設定は 1 時間半で、主に現在の恋愛観、過去の恋愛遍歴、友人と接する際の普段の自分を中心に聞き取りを行い恋愛希求行動無し群のもつ理由を探った。以下の表はインタビューに用いた各概念の質問項目である。

表 1 インタビュー質問項目

〈ロマンティック・ラブ〉

- Q1 好きになる異性の特徴は何ですか？
- Q2 苦手な異性の特徴は何ですか？
- Q3 あなたの思う理想の彼女を教えてください
- Q4 一度は付き合ってみたいと思う異性はどんな人ですか？
- Q5 どんな彼氏になりたいですか？
- Q6 浮気についてどう思いますか？
- Q7 どこからが浮気になると思いますか？
- Q8 仲の良い異性と恋人の違いは何だと思えますか？
- Q9 いまあなたにもし彼女ができたらどんな恋愛をする？
- Q10 ケンカしないカップルについてどう思いますか？
- Q11 ナンパについてどう思いますか？
- Q12 一目ぼれについてどう思いますか？

〈コンフルエント・ラブ〉

- Q13 何人もの異性と付き合ったことのある男ってどう思いますか？
- Q14 何にもの異性と付き合ったことのある女ってどう思いますか？
- Q15 付き合ったことのない男ってどう思いますか？
- Q16 付き合ったことのない女ってどう思いますか？
- Q17 彼女のいる男性といない男性の違いは何だと思えますか？
- Q18 彼女を作るために何が必要だと思えますか？
- Q19 今行動を起こさない理由は何ですか？
- Q20 付き合う女性の過去の性的経験についてどう思いますか？
- Q21 彼女とお互いの弱みコンプレックスを知っている状態についてどう思いますか？
- Q22 もし普段親交のある仲の良い異性の友人にあなたは恋をしていたらどうしますか？
- Q23 束縛についてどう思いますか？

〈過去の恋愛遍歴、固着した関係性〉

- Q24 今まで付き合った女性の数を教えてください
- Q25 それぞれの女性について好きだったところと嫌いだったところについて教えてください
- Q26 それぞれの女性との別れの理由について教えてください

〈友人と接する際の普段の自分〉

- Q27 対異性と対同性で普段の自分はどんな人ですか？
- Q28 異性と話すときに気を付けていることは何ですか？

また予想される回答の分析に Giddens の 3 つの概念（ロマンティック・ラブ，コンフルエント・ラブ，固着した関係性）を使用する。

### 3.3 調査当初

調査当初は女子大学生の恋愛希求行動無し群についても男子大学生同様に調査対象としていたが，質問項目が非常にプライベートな内容であり質問者と回答者の信頼関係が浅いものであると異性の質問者に聞かれたくない，回答したくないという意見，嘘の回答をされてしまう事が起こってしまった。そのため調査対象を男子大学生に設定しなおし，調査結果をまとめた。

以下は質問対象者である男子大学生の年齢と交際したことのある人数の表である。

年齢	22	23	21	22	21	22	22	22
交際経験	0人	0人	0人	5人	2人	3人	2人	1人

なお調査結果において，調査対象者によっては未記述の項目があるが，回答者が持つ恋愛に対する考えを自由に述べていただくために，本調査を半構造化インタビューで行ったためである。

以下からは各質問項目への回答に対して Giddens の 3 つの概念を使用し，恋愛関係に入れない要因は何であるのかについてまとめる。

## 4 結果と考察

始めに現在崩壊傾向にあるロマンティック・ラブの要素をもつ回答について記述し，次に現在主流となりつつあるコンフルエント・ラブで必要とされている特徴を達成できていない回答を中心に見ることなどでなぜ恋愛行動を起こさないのかについて考察する。

そして，コンフルエント・ラブの特徴を満たすが恋愛行動を起こさない回答者についても同様に記述し，その後「固着した関係性」について記述をする。

### 4.1 ロマンティック・ラブ

既に崩壊傾向にある愛の形である。親密な関係性のもととなったが親密な関係性と異なり男女間の愛の形である。特徴は以下の 5 点である。

第 1 に自らの意思や感情に基づいて交際相手や配偶者を選ぶことを肯定し，自分が選んだ相手と恋愛を経て結婚する。そして一度結婚してしまえば，ほかの人とは恋愛をしないという点。

第 2 に関係性が外部社会の基準よりも二人の感情的没頭に由来するという点である。

第 3 に関係性が「永遠」で「唯一無二」な特性を持つ点である。

第 4 に「特別な人」を捜し求める点である。

第 5 に「ほとんどの男性にとって，女性をたらしこまなければならない」という点である。

このロマンティック・ラブの考え方を持つのは A，B，C，E さんであった。まず，それ

ぞれのインタビュー結果で見られた特徴語を表にまとめ、その後具体的な回答を記述する。回答中の特徴的な箇所には下線を引いた。

表3 ロマンティック・ラブ特徴語	
	回答中の特徴語
A	結婚とか、あるかわからんけど考えるべき、付き合うならな相手と結婚できるか、その人だけを思いたい、自分が相手のことを友達以上にめっちゃ思えて、相手も自分のことをめっちゃ思ってくれるような子
B	結婚、将来を見据えて恋愛したい
C	いちず、浮気はせん、他の子に言い寄られてもいかない、一生愛していく覚悟がある、いちずに一人の女を愛したい、結婚についても今から真剣に考えてる
E	没個性な人は付き合いたくない、自分に惚れるってさアピールできる、惚れられとんやぞって優越感

Cさん〈交際経験なし、21歳〉Q5への回答

C うん、おれはいちずにおりたいな

\*\*<sup>2)</sup>いちずってどういうこと？

C それは結婚してたら浮気はせんとかかな

カップルでも、浮気はせんとか、他の子に言い寄られてもいかないとかまあ、理想なんかないいちずにおりたいっていうのは。

\*\*あー

C そう、理想なんよ。

\*\*なんでそう思う

C だって自分が愛した、好んだ一人の特定の人を一生愛していく覚悟があるってことやもんな。

それってさ、素敵なことやんだからそうなりたいし、あれこれ手を出す男っていうのは、かっこよくない。だって一本の軸をもたずにふらふらしてるってことやし。だからおれはいちずに一人の女を愛したい。んでそこに近づきたいって思う。だから結婚についても今から真剣に考えてる。もちろんかわいい子がいいけど。

Cさんはお付き合いした経験がない。Cさんは自身のことをいちずと表現し結婚に対する意識が強い。いちずとはCさんいわく、結婚したら浮気はしない、およびカップルでも浮気はしないとのことであった。この回答はロマンティック・ラブの持つ第1の特徴に当てはまる。さらに、好んだ人を一生愛していくことに対して憧れを示し、自らもそうなりたいと回答している。これは第3の特徴に当てはまる。

A さん〈交際経験なし，22 歳〉 Q13 の派生回答

A もし今後長いこと付き合って結婚とか，あるかわからんけど考えるべきやん？

\*\*まあ確かにな。A は付き合う上で結婚考えとん？

A そやな。重いとか思われるけどやっぱり考えるかな。

\*\*そーなんや。偉いな。薄い関係はいやってこと？

A うん，付き合うならな。相手と結婚できるか考えるかな。

だから，いろんな女のこと付き合ったことあるような男になりたいとかも思わん。自分がほんまに好きな人ができたらその人だけを思いたい。

あれこれ手を出したいとは思わん。

A さんも同様にお付き合いの経験がない。そして結婚についての意識が強く，多くの異性と付き合うよりも「自分がほんまに好きな人」とだけお付き合いしたいと回答している。この点が第 3，4 の特徴に当てはまる。そして A さんにたいして「ほんまに好きな人」とはどのような人なのかについて質問したところ

んー難しいな，でも〇〇さんみたいにかわいくて自分が相手のことを友達以上にめっちゃ思えてなおかつ相手も自分のことをめっちゃ思ってくれるような子かな。

と回答した。この点から恋愛相手の具体像をもち相互に相手に対して感情を移入できるような相手を求めている。この点から第 2 の特徴に当てはまる。

B さん〈交際経験なし，23 歳〉 Q2 への回答

\*\*苦手な人の性格は？

B やっぱりなんか無頓着な人とか，人の気持ちをくみ取れないひとかな。

\*\*理由は？無理な理由。

B いやとしかいえない。考えられへん。結婚とかしたら制約されるのに，自分勝手なことしてたら相手に迷惑かけるやん。お金のこともあるし，やっぱり将来を見据えて恋愛したいからそういうところは見てるな。

B さんも同様にお付き合いした経験はない。しかしながらやはり将来を見据え恋愛をしたいと回答し，将来を考えたうえでお付き合いできる人を探している。

E さん〈交際経験 2 人，21 歳〉 Q3 への回答

E 俺よくおるような大学生は好きじゃないんよ，なんやろ個性ないやん。没個性な人は付き合いたくないな。

\*\*個性がほしいんや。どんな個性を相手に求めるん？

E なんか自分がその生活もありきで何か他に自分が例えば好きなモノ？とかを陰でめっちゃやってるとかまあ表に出してもいいけど。とりあえずなんか自分が好

きなことを持っているというか、それが自分のなんか技術として身につけてるトップクラスの特技を持つてる子がいいかな。なんでもだからその背景を考えるかな。その、あっこの子この特技身につけるのにはここもいろんな努力してきたんやとか。ちょっとあるやん、人間的な評価というか。でもなかなか難しいよなみつけるのって。だから理想は高いそういう意味ではね。

\*\*そーいう人がええねんな。

E うん。しかもすごいひとが自分に惚れるってさアピールできるやん。

\*\*どうということ？

E だって、おれこんなやつから惚れられとんやぞって優越感にひたれるやろ、それが気持ちいい。

Eさんはほかの3人とは違い交際経験がある、そして結婚という言葉は出ず質問13の回答にも不快感を示さず、「べつにいいやん」との回答を示した。結婚の意識は強いわけではないが上記のインタビュー内容では相手に強い個性を求めており、上記の第4の特徴を有している。さらに強い個性を持つ人をたらしこませることから優越感を得ている。この点で、第5の特徴に当てはまる。

インタビュー結果から4人はロマンティック・ラブの理論に当てはまる。まずA,B,Cさんについて考察する。この3人は恋愛対象の相手に対して「永遠」で「唯一無二」の関係性を望んでいること、そしてその恋愛対象者との結婚を望み、他の女性との関係を持たないと述べている点でロマンティック・ラブの特徴を持つ。上述したようにロマンティック・ラブは結婚という枠組みに守られていた時代では理想とされた愛の形であった。

一方で現在では、お互いの自発的な感情によって関係性の構築や維持、そして解消をすることが出来る。したがって関係性は「永遠」で「唯一無二」ではないのである。しかし3人は質問項目13番に対しての回答では「理解できない」「おれは嫌やな」等の否定的な意見を多く挙げ、様々な異性に対して積極的に恋愛行動を起こすのではなく、恋愛をするなら将来結婚できるような「特別な人」にたいして恋愛行動を起こしたいという考えが共通していた。つまり、恋愛はしたいが自分の思う特定の「特別な人」にしか行動を起こしたくないという考え方を持っているのである。そのため実現性のある恋をすることができていない。つまり思い描く理想のみが先行している状態である。

そして現在の恋愛関係は不安定であり簡単に解消されてしまう可能性を持つため、仮に自分が心から愛することができる人と付き合ったとしても断られることで自分自身が傷ついてしまう可能性がある。その精神的リスクについてはコンフルエント・ラブの問題点に当てはまるが、A, B, Cさんはこのリスクに耐えうる精神力を持っていないことが以下のAさんの回答を例に確認することができる。

Aさん〈交際経験なし、22歳〉Q9の派生回答

A もし付き合うことができたなら、付き合ってる彼女に振られたらどうしようって絶対考えるな。

\*\*なんで？

A だって、今までおらんかったからようやく付き合えた彼女やで？絶対立ち直れん自信あるで？

さらに回答する様子からも A, B, C さんは自分自身が否定されて傷つくことを他の対象者以上に気をかけていることが感じられた。その理由として自分自身のことについて尋ねられているような質問である〈自分の理想の彼女についてや、自分がどのような彼氏になりたいか、自分の性的経験についてなど〉にこたえる際に、〈プライベートな質問であるので恥ずかしいという考えを持つのは当然であると理解できるが〉最も時間をさき、こちらから聞きこんでいくことで少し言葉を濁しながらもようやく答えにいたることが非常に多かったからである。このような精神力の弱さの部分と、永遠で唯一無二の関係性を求めることが A, B, C さんが恋愛行動を起こさない要因と考えられる。そして興味深い点はロマンティック・ラブの特徴に含まれる結婚について答えた 4 人のうち 3 人に交際経験がないことである。交際経験がないことで恋愛というものが、交際経験のある人以上にどのようなものであるのか理解できていない状況にあると考えられる。その理由としてどんな恋愛をしてみたいかというインタビューになった際に「付き合ったことがないからわからんわ」というような回答が見られたためである。しかしながら結婚を意識した回答も多くみられ、交際経験がない人ほど早く結婚をしたいという傾向が表れた。

一方で同様にロマンティック・ラブにあてはまる回答をしめた E さんについて記述する。E さんは自分の理想の彼女についての質問や好きになる異性の特徴についての質問の際に他の質問では見るができなかったような気分の高ぶりが見られ、意気揚々と具体的な自分の好きな女性の性格について回答する様子がかがえた。インタビュー時間の中でこの 2 点の質問で最も時間を割くことになったことから自分の中にある理想像がいかに確立されているかがうかがうことができた。E さんと A, B, C さんの共通点は自分の思い描く理想像である「特別な人」にたいして恋をしたいという思いである。一方で A, B, C さんとの違いは「特別な人」を求める理由であった。A, B, C さんは過去のお付き合いをしたことがない状況であるので、恋愛をするのであれば結婚を考えることのできる理想通りの人になりたいというような理由からであった。では E さんが「特別な人」を求める理由について以下に記述し考察する。

E 回答〈交際経験 2 人, 21 歳〉 Q4 からの派生回答

E しかもすごいひとが自分に惚れるってさアピールできるやん。

\*\*どうということ？

E だって、おれこんなやつから惚れられとんやぞって。

優越感にひたれるやろ、それが気持ちいい。

この回答で「特別な人」を求める理由を考察することができる。E さんは他者に「アピール」することで得られる「優越感」を「特別な人」を求める理由の一因としているのである。つまり E さんは周囲からの評価を考え恋愛をする傾向にあることである。これに対して以下の Erik H Erikson (1959=2011) の指摘が当てはまる。

若者たちは、時に病的なほど、多くの場合は奇妙に思えるほど、夢中になって《自分自身についてどう感じるか》と《他人の目にどう映るか》を比べ、あるいは《それまでに培ってきた役割や技能》と《この時代の理想となるプロトタイプ》をいかに結びつけるかという問いに没頭する (Erikson 1959=2011: 95)。

E さんのように若者が周囲からの評価を求める理由は自己のアイデンティティが近代の社会生活において、とりわけ著しく不確かなものになっており (Giddens 1992=1995)、中でも青年期は Erikson によると (1959=2011) アイデンティティの形成の最終段階でありこれまでになく深く苦しむからである。したがって若者たち (ここでいう E さん) は周囲のひとから恋愛を通じて承認され自分のアイデンティティを確かなものにするために「特別な人」を求めていると考えられる。これらの結果より E さんについて考察すると、E さんは A, B, C さんと同様に自分の思い描く「特別な人」を求めることで理想が先行している状態であり、実現性のある恋愛ができていない。さらに、E さんの場合は周囲の人から承認されるために、その特別な人に対してすぐれた性質能力を求めている。つまり相手を選ぶ基準が非常に高い。これらの要因が恋愛行動をおこさないと考えられる。

#### 4.2 コンフルエント・ラブ

コンフルエント・ラブは現在誕生しつつある愛の形であり、その特徴を以下に述べる。  
 第1に能動的な、偶発的な愛情であり、ロマンティック・ラブに対する「永遠」で「唯一無二」と矛盾する点。  
 第2に対等な条件の下での感情のやり取りを想定しており、お互いに相手に対してどれだけ関心や要求をさらけ出し、無防備になれる覚悟があるのかによって愛情を量る点。その感情のやり取りのために相互のコミュニケーションが必要不可欠である。  
 第3に関係の維持か解消かを関係性の継続が価値あるものとするに十分な利益をお互いに得られているのかで判断できる点であり、相手との関係性に満足できない場合は、簡単に別れることがある点。簡単に別れてしまうことができるので関係性が解消されたときのリスクに耐えうる精神力が必要となる。

表4 コンフルエント・ラブ特徴語

表4 コンフルエント・ラブ特徴語	
	回答中の特徴語
A	付き合ってる彼女に振られたらどうしようって絶対考えるな、絶対立ち直れん、素直に自分を出すことができない
B	振られたくない、失う、自信なくなって、積極的にあんまり言わなくなった
C	どういう状況でどういうこと言ったらいいかとかさいまいちわかってないから、基本相手の意見に合わせようかなって思うかな。
G	基本的に隠しておきたいな。
H	感情表現するのが下手、自信がないし、自然にしゃべれん
F	相手に自分の事は出来るだけ相手に言いたい、いずれまたできるんじゃないか、楽観的、欲しいけど満たされてないわけじゃない、満足してる

コンフルエント・ラブの3つの特徴をふまえ、行動を起こせない要因をコンフルエント・ラブの視点から考察する。この視点から考察できたのはA, B, C, G, H, Fさんである。まず、それぞれのインタビュー結果で見られた特徴語を上記の表でまとめ、その後具体的な回答を以下に記述した。具体的な回答で表れた特徴的な箇所には下線を引いた。

#### Aさん〈交際経験なし、22歳〉Q21の派生回答

おれさ、交際経験がなくて自分に自信なくて、コンプレックスもあるから自分のこういう一面出したときに相手にどんな反応されてしまうんやろっていう思いがあってなかなか素直に自分を出すことができないんよ。

この回答からは交際経験がないこと、自分に自信がないこと、コンプレックスがあることから相手に対して無防備になる覚悟を持っていないことがわかる。

#### Cさん〈交際経験なし、21歳〉Q5の派生回答

自分は交際経験がないし女の子の友達もほぼほぼおらんくてさ、どういう状況でどういうこと言ったらいいとかさいまいちわかってないから、基本相手の意見に合わせようかなって思うかな。

Aさん同様にCさんは交際経験がないことから、自分の伝えたい要求を相手に伝えられず相互のコミュニケーションを行えない状態である。

上記のAさん、Cさんは交際経験がないことを理由に自分の感情を相手に伝えられないもしくはどのように伝えればいいのかわからないと回答している。つまり交際経験がないこと自体が、女性にたいして自らの感情や意見を伝えることができない原因になっており、恋愛するための行動を起こすことができなくなっている。以下に交際経験がないことが与える影響について考察する。高坂（2013）は恋愛不要群に対する研究で、恋愛不要群の中の「異性に対する魅力や異性交際の仕方など恋愛に対する自信がないために、恋人をほしいと思っていない」若者のアイデンティティの確立の程度が低いと証明した。その点でErikson（1959=2011）の指摘した「自分のアイデンティティに確信が持てない若者は、対人的な親密さを怖がって尻込みする」という指摘を支持する結果を出した。この研究結果と同様に恋愛希求行動無し群における恋愛未経験の若者も恋愛に対して自信がない回答が多いのでアイデンティティの確立の程度が低いと考えられる。しかし高坂（2013）の研究と異なる点は恋愛したいと思っている点である。上述したが、AさんとCさんは自分の心の中にある理想像「特別な人」に対して行動を起こしたいと思っている。しかしA、Cさんは行動を起こしたいが理想となる相手が実際にいないという状況に陥り、その結果として交際経験がなく、自分がどのように行動していいかわからなくなったことで、対人的な親密さを怖がることで行動できない状態である。

B さん〈交際経験なし，23 歳〉 Q27 の回答

B 昔から友達に恋愛についていろいろ言われることがあって，お前じゃ無理やとか，なんかそういうことを言われると自信なくなって，自分のことを積極的にあんまり言わなくなったな。

\*\*それは友達にも？恋人ができたとしても言わん？

B うん，両方そうやな。

この回答からは友人からの発言によって自分に対して自信がなくなりコミュニケーションを積極的にすることがなくなったことが読み取れる。

G さん〈交際経験 2 人，22 歳〉 Q21 の回答

俺いじられキャラ<sup>3)</sup>でいじられることが多いんやけど，その分コンプレックスも多いわけでさ，そういうところを恋人に出すのはマイナスでしかないし，基本的に隠しておきたいな。

B さんと同様に友人から影響を受けることで自分への自信がなくなり，相手に対して無防備になれない状態が表れている。

H さん〈交際経験 1 人，22 歳〉 Q27 の回答

H 共通して言えるのは，自分から表現するのが，感情表現するのが下手やと思うな。

\*\*なんでそうおもう？

H んー根拠はあんまり俺趣味がなくてさ，趣味以外でもあんまり自分をさらけ出して，話せるもんがなくて自信がないし自然に話すことができなくて感じてるからやな。あとおれいじられキャラで，なんかずっと受け身になってるから自分からいざ能動的に，話しかけても面白くないとか言われるのがいややから自然にしゃべれんくなったかな。

この場合も B さん，G さん同様に自分から感情表現することが苦手な事例であり，友人からの影響も受けたことで能動的に自分からコミュニケーションをとることができなくなっている。

B，G，H さんに共通していることは，友人からの影響を受けたことで自ら積極的に感情や意見をさらけ出し無防備になることができなくなっている。そのためコンフルエント・ラブに必要なコミュニケーションをとることができず，恋愛はしたいが一步踏み出すことができない状態であるのだ。そしてこの 3 名は（全ての友人に対してというわけではないが）友人とのかかわり合いが真に心を許したのではなく，他者との親密さを拒否する一面が見られる。このような状況に対して Erikson は以下のように述べる。

青年後期や成人初期に、若者が他者とうこうした親密な関係を築くことができないと「付け加えると、自分自身の内的な資源と親密な関係を築くことができないと」、自分自身を孤立させ、せいぜい非常にステレオタイプ化された形式的な対人関係しか見出すことができないか（この形式とは、自発性・温かみ・本物の友情の交換の欠如を意味する）、あるいは、何度も試み何度も失敗しながらそうした親密な関係を探し求めなくてはならない（Erikson 1959=2011: 103）。

この指摘よりこの3名は自身を孤立化させステレオタイプ化された形式的な対人関係に入っていくのではないだろうかと考えられ、その可能性が最もうかがえるインタビュー結果をAさんの回答を例に挙げる。

Aさん〈交際経験なし、22歳〉Q27の派生回答

俺は周りからいろんなことを言われるのがしんどいからなんも考えずに、気を遣わず、言ったら無の感情で一緒におれるような人と友達になりたいって思ってる。

この事例から友人に求める要素に自発性や温かみ、友情を感じることは出来ない。仮にこの3人が自らの好きになった相手に対して関心や要求をさらけ出し、無防備になれる覚悟ができたとしても、他者と親密な関係を築いていなければ、ステレオタイプ化された対人関係に入ってしまう可能性がある。そうならないために日常から「個人のアイデンティティの定義を求める試みのために働き、果てしなく議論を続け、何を感じ相手がどう見えるか打ち明け合い、計画・願望・期待について話し合う」という行動が必要になるのである（Erikson 1959=2011）。以上からこの3人は普段からの友人関係において親密な関係を築けていないがゆえに対人関係が形式的になっている。そのため相手に対して関心や要求をさらけ出し無防備になれる覚悟がない状態である。これが恋愛をしたいが行動できない要因と考えられる。

Fさん〈交際経験3人、22歳〉Q21の派生回答

付き合ったら、相手に自分の事は出来るだけ相手に言いたいかなって思う、自分のことを相手がある程度知ってくれていたら、こっちとしても付き合っていきやすいんじゃないかって思うし。

Fさんの場合は感情のやり取りのために自分が無防備になることを恐れていない。したがって現在の愛の形であるコンフルエント・ラブが求める特徴にあてはまることで、恋愛に対して適応しているといえる。ではいったいなぜ恋愛に入るための行動を起こさないのか。その要因が次のQ19のインタビュー結果に表れている。

F恋人はほしいんやけどさ、いづれまたできるんじゃないかって思ってるんよ。今のままだも自分からじゃなくて嬉しいことに全部あいてから来てくれたしな。

やから焦って行動するんじゃなくて、ほかの自分のやりたいことをやりながらプラスアルファでいいやって思う。

\*\*そーなんやな。

F たぶんな。おれは楽観的なんやわ。自分のやりたいことやりたいし、友達と遊ぶのは楽しいから、彼女は欲しいけど満たされてないわけじゃないからいちおう生活には満足してるから欲しいけど行動はせんな。

この点から F さんは基本的に恋人がほしいと思っはいるが、欲しいと思う程度が強くない状態であり、F さんは恋愛を「日常の生活のスパイス」と表現していた。F さんの場合、恋愛の順位付けが高いわけではなく恋愛に対して受け身である。このように日常が充実しており恋人はいずれできると考えている人は高坂（2013）の研究でも見られた。高坂（2013）はこのような人を楽観予期群と呼んでいる。高坂（2013）の研究では恋愛不要群における楽観予期群についてのものであったが本研究では、恋愛希求行動無し群における楽観予期群である。ではなぜ F さんのような人が存在するのか考察する。

1960 年代に見られたようなロマンティック・ラブでは上述したが「ほとんどの男性にとって、ロマンティック・ラブは、女性を誑し込まなければならないという至上命題と緊張状態に置かれている」ので男性から女性へアプローチをかけるのが一般的であり、女性は結婚するまで処女でいることが求められていた。しかしながら現在はその状況が変化している。内閣府『結婚・家族形成に関する世論調査』では恋愛に関する考えの質問項目「恋愛に対する考え方」の気になる相手に自らアプローチをかけると答えた人数は男女にほとんど差は見られなかった点からも確認できる。この変化の理由は現代になり、女性の自立および性的開放が進んだことが挙げられる。したがって F さんはこの変化を受け入れたこと、日々の充実感、さらに過去に数多く女性側からアプローチをかけられたという経験から、行動を起こさなくても恋愛をすることができると考えている。

#### 4.3 固着した関係性

特徴としては自分と相手でお互いに強く依存しあう関係であること、そしてお互いに相手が求める〈他者性〉に依存していくことである。

この関係性に陥りやすい思考を嗜虐的プログラミングといい、否定的な思考方法である。

##### 具体例

- 「そんなことは、自分にはとてもできない」
- 「そんなことしたって上手くいかないのが自分にはちゃんとわかっている」
- 「そんなことは、自分には向いていない」等

本調査の結果としてこの「固着した関係性」、つまりお互いに依存しあう関係性を望む対象者はいなかったが、D さんは「固着した関係性」を経験していたと考えられる。その経験についての回答で表れた「固着した関係性」の特徴語を以下に表にまとめ、その後 D さんの回答を示し、特徴が表れている箇所に下線を引いた。

表 5 固着した関係性の特徴語	
	回答中の特徴語
D	束縛、一緒に死のう、依存、やってあげたくなってさ、放つとけんかったな やっというて欲しい、なんでおれがここまでせなあかんのかな

D さん〈交際経験 5 人、22 歳〉Q26 の回答

D おれさ付き合ってた彼女にさ、束縛されていたことがあってさ、最終的に一緒に死のうって言われたことあんねんけど。

\*\*まじ？

D うん、まじまじ。まあ最終的にな？で結局別れたんやけど、別れるまでいろいろあってさ。

\*\*うん、なにがあったん？

D 束縛と依存の嵐よ、なんか毎日電話とかあって俺自体はすごいめんどくさかってんけど続けてあげててん。

\*\*なんで？

D いや、その子俺のタイプでめっちゃ可愛くてさ、やっぱ頼まれるとさ、やってあげたくなってさ。

\*\*すごいな。でも死のうって言われたの衝撃やな。

D やろ？でも死のうって言われたのもあって放つとけんかったな。

この回答を考察する。この 2 人の関係性は先行研究で述べた例で表すと D さんの当時付き合っていた彼女が依存症者であり、D さんがそのパートナーにあたる共依存の関係であったことがわかる。D さんの付き合っていた彼女が D さんに依存することで、D さんが彼女に対して心遣い、献身的な行動を行っているからである。この関係性を続けていた D さんは自身が相手に対して依存していたという事に気づいていない。この点も Giddens (1992=1995) の述べる固着した関係性に陥った当事者が「双方とも、自分が相手に当然のように依存していることを認めたり、あるいはその事実を甘受していくことが十分にはできない」という点にも当てはまる。では、なぜ D さんは固着した関係性に陥ったのかを考える上で、D さんは固着した関係性に陥りやすい思考方法である嗜虐的プログラミングをおこなっていたのかについて以下に述べる。結論から述べると陥っていなかったと考えられる。理由としては「自分にはできることやったら、相手ができなかったらやってあげられるやん、それやったら俺がやってあげればいだけやん。」という回答があったことから、その関係性において D さん自体は〈できない〉というような嗜虐的プログラミングは行っていない。しかしながら、お付き合いしていた彼女に嗜虐的プログラミングがあったと考えられる。以下に当時付き合っていた彼女についての回答を示す。

\*\*その人はどんな人？

D んーかまってちゃんというか、子どもみたいな人やったな。

\*\*子供みたいとは？

D なになにやっといて欲しいとか、めっちゃ言ってくる人やった。

この回答から D さんの彼女は頼みごとが多く、できないことがあれば D さんにまかせ  
る傾向にあり嗜虐的プログラミングがあったのではないかと考えられる。そしてこの点か  
ら関係性の内のどちらか片方に嗜虐的プログラミングがあった場合でも固着した関係性に  
陥る可能性があるという事が理解できる。

では、どのように固着した関係性から抜け出し別れることとなったのか、以下に別れの  
理由についての回答を示す。

\*\*別れの理由ってなんやったん？

D 別れの理由か、普通に疲れたんよ。なんでおれがここまでせなあかんのかな  
て思うようになったら自然と、別れなくなつたんかな。

この回答から、D さんは Giddens (1992=1995) の述べる「個人的境界」を持つことが  
できるようになったと考えられる。D さんは「なんでおれがここまでせなあかんのかな」  
と思うことで自分と彼女の間に線引きを行い、自分の考えを持つことすでに確立してい  
た「やってあげよう」という行いから解き放たれ、自由な選択、この場合の別れを選択す  
ることができたのである。ではこの経験が D さんの恋愛の考え方に与えた影響は一体何で  
あったのか、以下に回答を示し考察する。

\*\*その彼女と付き合ってみてなんか変わったことある？

D 変わったことか、んーなんやろ。単純にかわいいからとかタイプやからで選ぶと  
痛い目を見るとか？

\*\*あーなるほど。付き合う相手の条件きつくなつたん？

D なつたなつた。

\*\*どういうところ見るようになった？

D 性格やな。顔だけで判断してもいいことないぞ。

\*\*性格を判断するために今なんか気を付けてることある？

D んーなんやろ。やっぱ当たり前やけど、時間をかけて相手のことを知るのが大事  
なんちゃうかな。

回答から付き合うための条件が変化したことが分かる。その変化とは相手の性格につい  
てよく知るために時間をかけるという事である。D さんは以前より慎重に相手を選ぶため  
に、行動をすぐに起こさないという手段を取っているのである。この点が D さんの恋人が  
ほしいと思っても行動しない要因となっている。

#### 4.4 全体の傾向

この章では調査によって得られた特徴ごとに分類し〈恋愛希求行動無し群〉の行動を起  
こさない理由についてまとめる。

〈自信喪失型〉

友人からの影響もしくは交際経験がないことにより自信喪失がみられる人たちを〈自信喪失型〉と分類する。この型に当てはまる回答者はA, B, C, G, Hさんである。

この型に当てはめた根拠として以下に回答されたものを表にまとめた。

A	おれさ、交際経験がなくて自分に自信なくて、コンプレックスもあるから自分のこういう一面出したときに相手にどんな反応されてしまうんやろっていう思いがあつてなかなか素直に自分を出すことができないんよ。
B	昔から友達に恋愛についていろいろ言われることがあつて、お前じゃ無理やとか、なんかそういうことを言われると自信なくなって、自分のことを積極的にあんまり言わなくなったな。
C	自分は交際経験がないし女の子の友達もほぼほぼおらんくてさ、どういう状況でどういうこと言ったらいいとかさいまいちわかってないから、基本相手の意見に合わせようかなって思うかな。
G	俺いじられキャラ <sup>3)</sup> でいじられることが多いんやけど、その分コンプレックスも多いわけでさ、そういうところを恋人に出すのはマイナスでしかないし、基本的に隠しておきたいな。
H	自分から表現するのが、感情表現するのが下手やと思うな。根拠はあんまり俺趣味がなくてさ、趣味以外でもあんまり自分をさらけ出して、話せるものがなくて自信がないし自然に話すことができなくて感じてるからやな。あとおれいじられキャラで、なんかずっと受け身になってるから自分からいざ能動的に、話しかけても面白くないとか言われるのがいややから自然にしゃべれなくなったかな。

〈自信喪失型〉は自分の感情や意見をさらけ出すこと、およびさらけ出すために必要となるコミュニケーションをとることができなくなっている状態にある。この型のうち友人から影響を受け自信をなくした人たち(B, G, Hさん)は友人を含む他者と親密な関係を築くことができていることで、自分自身を孤立化し対人関係に自発性や温かみ、本物の友情が欠如しているような形式的な対人関係しか見出すことができなくなる。この型がもつ恋愛をするための行動を起こせない要因はコミュニケーションが取れず、相手に対して感情や要求をさらけ出し無防備になれないことと対人関係の形式化である。

〈理想先行型〉

ロマンティック・ラブの要素が強く、自分が思う「特別な人」に対してのみ行動を起こそうとする人を〈理想先行型〉と分類する。この型に当てはまるのはA, B, C, Eさんである。この型に当てはめた根拠として以下に回答されたものを表にまとめた。

表 7 理想先行型の主な回答	
A	付き合うならな. 相手と結婚できるか考えるかな. だから, いろんな女のこと付き合ったことあるような男になりたいとも思わん. 自分がほんまに好きな人ができたらその人だけを思いたい. あれこれ手を出したいとは思わん.
B	結婚とかしたら制約されるのに, 自分勝手なことしてたら相手に迷惑かけるやん. お金のこともあるし, やっぱり将来を見据えて恋愛したいからそういうところは見てるな.
C	だって自分が愛した, 好んだ一人の特定の人を一生愛していく覚悟があるってことやもんな. それってさ, 素敵なことやんだからそうなりたいし, あれこれ手を出す男っていうのは, かっこよくない. だって一本の軸をもたずにふらふらしてるってことやし. だからおれはいちずに一人の女を愛したい. んでそこに近づきたいって思う. だから結婚についても今から真剣に考えてる. もちろんかわいい子がいいけど.
E	俺よくおるような大学生は好きじゃないんよ, なんやろ個性ないやん. 没個性な人は付き合いたくないな. なんか自分がその生活もありきで何か他に自分が例えば好きなモノ? とかを陰でめっちゃやってるとかまあ表に出してもいいけど. とりあえずなんか自分が好きなことを持っているというか, それが自分のなんか技術として身につけてるトップクラスの特技を持ってる子がいいかな. なんでもだからその背景を考えるかな. その, あっこの子この特技身につけるのにはここもいろんな努力してきたんやなとか. ちょっとあるやん, 人間的な評価というか. でもなかなか難しいよなみつけるのって. だから理想は高いそういう意味ではね.

〈理想先行型〉は想像上の人に対して恋をしている段階にある. そのため自分が想像した「特別な人」に思いを寄せているため実現性のある恋ができていない状態に陥っている. その中でも Eさんは周囲の評価を得るために「特別な人」の基準が高い状態である. この型がもつ恋愛するための行動を起こせない要因は想像の中の「特別な人」に恋をしていることにより実現性のある恋ができないことと自分の思い描く理想像の高さである.

#### 〈過去の恋愛影響型〉

過去の交際経験に影響を受け行動を起こさない人を〈過去の恋愛影響型〉と分類する. 「過去の恋愛影響型」の中には過去の恋愛を受けて恋愛に対して楽観的な考えをする人と慎重な考え方をする人が存在している. 本調査では Fが楽観的な考えを持つようになり, Dさんが慎重な考えを持つようになっている. この型に当てはまる根拠としての回答は以下に表にまとめる.

表 8 過去の恋愛影響型の主な回答

F	<p>恋人はほしいんやけどさ、いずれまたできるんじゃないかって思ってるんよ。今のままでも自分からじゃなくて嬉しいことに全部あいてから来てくれたしな。やから焦って行動するんじゃないくて、ほかの自分のやりたいことをやりながらプラスアルファでいいやって思う。たぶんな。おれは楽観的なんやわ。自分のやりたいことやりたいし、友達と遊ぶのは楽しいから、彼女は欲しいけど満たされてないわけじゃないからいちおう生活には満足してるから欲しいけど行動はせんな。</p>
D	<p>単純にかわいいからとかタイプやからで選ぶと痛い目を見るとか？やっぱ当たり前やけど、時間をかけて相手のことを知るのが大事なんちゃうかな。</p>

楽観的考えを持つようになった人は現在の生活に充実感を持っており、過去の恋愛では女性のほうからアプローチされた経験を持っていた。そのため恋人はほしいとは思っているが優先順位が高いわけではないために自ら行動をすることなく、さらに過去女性からのアプローチも受けているので行動を起こさなくともお付き合いすることはできると考えているため行動を起こさない。一方で慎重な考えを持つようになった人は過去の恋愛での失敗談（Dさんでいう固着した関係性）が影響しており、次は失敗をしないように相手を見極めるための時間を必要とするようになってきている。そのため恋人がほしいと思っても慎重になりすぐには行動を起こさない。この失敗しないようにという思いが恋人をほしいと思っても行動しない要因である。

## 5 おわりに

以上の3種類が〈恋愛希求行動無し群〉が行動を起こさない要因である。本調査から見えてきたことは〈恋愛希求行動無し群〉にはそれぞれのもつ原因があったが、基本的に自分に対して自信がない方が多いという事が分かった。自分に自信がないことでコミュニケーションが取れず、相手に自分の感情や意図を伝えられない状態に陥っていることが分かる。現在の愛の形であるコンフルエント・ラブは能動的な、偶発的な愛情である。自ら相手に対して能動的に行動して初めてお互いを理解し合うことができ、2人が共有した歴史が生まれることで、愛が育まれていくのである。しかしコミュニケーションを自ら取りにいけない状況であれば自らは受動的になり、相手から積極的に来てもらわなければ動けないというような状況に陥ってしまう。それでは愛情が一方通行になり、お互いが対等な関係性にはならない。相手と対等で親密な関係を築くことができなければ形式的な対人関係に陥る可能性をも有している。関係性を発展させる、もしくは上手く続けるためには仮に自信がなかったとしても、相手を信じて自分をさらけ出さなければならないのである。したがって積極的に行動を取れない男性は相手を信頼し自分をさらけ出すことが重要なのである。最後に今後の課題について述べる。本調査では、当初男性のみならず女性に対しても調査を行うこととしていたが、調査対象者と調査者との関係性などの理由から断念することとなった。恋愛というのは男女双方の関係性から成り立つものであるため、今回の男性の結果を踏まえたうえで女性にも調査を行うことで様々な角度から恋愛というものを調

査する必要がある。さらに今回の調査では対象者が8名であったためより今後は調査対象者を増やしより詳細な調査を行いたい。

〔注〕

- 1) 恋愛希求行動無し群とは恋人がおらず恋人は欲しいが恋人を作るために行動しない人
- 2) 本調査では聞き手についてはすべて「\*\*」で統一している
- 3) いじられキャラとは他人から悪意がないようなからかいを受けやすく周囲がそれを当たり前としており受け入れている状態

〔参考文献〕

- Anthony Giddens,1992,*The Transformation of Intimacy,Sexuality,Love and Eroticism in Modern Societies*,UK,Polity Press. (=1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容』而立書房.)
- Dietch,J,1978,*Love sex roles and psychological health*,*Journal of Personality Assessment*,42:626-634
- Erik H.Erikson,1959,*Identity and the Life Cycle*: International Universities Press, Inc. (=2011, 西平直・中島由恵訳「アイデンティティとライフサイクル」誠信書房.)
- 林 雄亮編, 2018,『青少年の性行動はどう変わってきたか——全国調査にみる40年間』ミネルヴァ書房
- 井上俊, 1973,『死にがいの喪失』筑摩書房
- 高坂 康雅, 2013,「青年期における“恋人を欲しいと思わない”理由と自我発達との関連」『発達心理学研究』24(3):284-294
- 厚生労働省, 2016,『人口動態統計の年間推移』
- 内閣府, 2014,『結婚・家族形成に関する意識調査報告書』
- 岡田 努, 2007,『現代青年の心理学——若者の心の虚像と実像』世界思想社
- , 2010,『青年期の友人関係と自己——現代青年の友人認知と自己発達』世界思想社
- 谷本奈穂・渡邊大輔, 2016,「ロマンティック・ラブ・イデオロギー再考恋愛研究の視点から」『理論と方法』数理社会学会, 31卷(1):55-68
- 和田実, 2000,「大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情および関係崩壊後の行動的反応」『The Japanese Journal of Experimental Social Psychology』, 40(1)38-49.